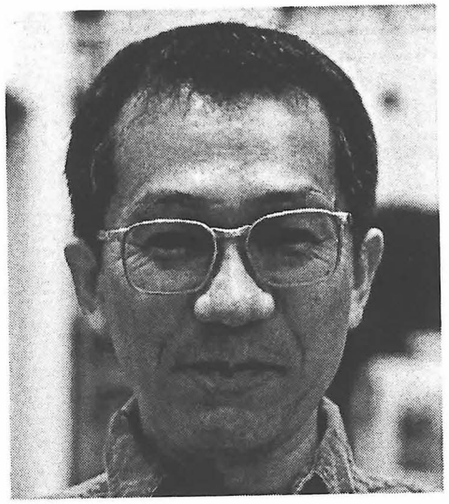
1997-29
『あのひとの選んだ１０冊』（再録『ダ・ヴィンチ』
第３巻第８号通巻２８号）
ダ・ヴィンチ編集部編　pp.29～40
リクルート ダ・ヴィンチ編集部 1997.12.24発行



外国人とうまくつきあうための
宗教本10冊

橋爪大三郎

Daisaburo Hashizume

宗教を理解せずして
外国を理解することは、できない

おまけ

毎日新聞 1997年（平成9年）6月15日（日曜日）

新刊本・いろ・いろ・紹介

島森　路子　評

橋爪大三郎の社会学講義 2

橋爪大三郎著（夏目書房・2000円）

日本という国を構想する道筋を示す

『社会学講義』に入る前の、文字通り「講義にはいる前に」と題した前書きの冒頭で著者は書いている。「日本は、むずかしい場所にさしかかったと思う」。

おそらく、これは、この時代を生きている多くの人の実感だろう。時代は、日本は、あきらかに大きな曲り角を曲がった。それに伴うさまざまな矛盾や問題も吹き出している。が、そういう事態の前で、私たちは手もなく立ちつくしている。一つひとつの事態が、きわめて具体的で緊急なそのくせ長期的視野を含んだ判断を私たちに求めている。にもかかわらず、この判断と決断が一人ひとりにとって容易ではない。政治家や官僚や企業家や、あるいは知識人といった国のリーダーたちだけの問題ではない。それと同時に、私たち自身の直接的でぬきさしならぬ問題になってきているところが、この時代の、この日本のやっかいなところである。なぜ、こんなことになったのか。

二年前に出された『橋爪大三郎の社会学講義』に続くこれは第二弾なのだが、前作同様ここでも橋爪の「講義」は、きわめて明解で筋が通っている。

なぜ、日本株式会社はうまくいかなくなったのか。なぜ、日本人はここまで自信をなくしてしまったのか。なぜ、日本人は自分の歴史を見失ったのか。過去の台湾、朝鮮統治に対して、私たち日本人はどう考えればいいのか。憲法は？　日本の安全保障は？　危機管理は？　大学（教育）は？　私たちの生活は？

そうしたさまざまの命題、本質的で同時にジャーナリスティックでもある命題に、著者は、まっすぐに向かい合う。問題のもともとのところ、その依って来たるところに立ち返り、その地点から、現在の問題をわかりやすく解きあかそうとする。むろん、ここに全ての答が用意されているわけではない。そうではなくて、私たちが答を見つけるための道筋が、そのための基本的なスタンスの取り方が、だれでもわかる言葉で提示されている。

社会学者である著者は、第一の講座を「社会科学を学びたいあなたへ」と題して、社会学とは何か、その学問としての歩みから解きあかすのだが、そこには象牙の塔（古いコトバ！）にこもりがちな学問を、現実の私たちの生きている社会の中で生かす方法を見つけたい、それができてこその"社会学"だ、という思いがひそんでいるようだ。とりわけ、こういう混沌とした時代、転形期にこそ、学問は学問として自己完結するのでなく、むしろ時代をリードする形でジャーナリスティックな働き（役立ち方）をしてほしい。

だからこれは、まるで学生に与える書といった体裁は取っているが、実は、最も今日的な、さらにいえば未来的な、この日本という国を構想していくための手がかりをともに考えるための論考集である。

「現代の日本人は、精神的に未熟である。そう思えて仕方がない。それは、一人ひとりの人格のなかに、個人としての自己と、国民としての自己とが、独立して存在していないからである。別の言い方をすれば、両者を関係づけるはずの歴史をわれわれが見失い、個人と国民を同時に自己のなかに抱えておくことができないでいるからである。歴史を失うということは、文化を失い、国家を失い、人間の尊厳を失うということなのだ」

いいかえれば、これは、もう一つの日本人論であり、まともな日本人になるための入門書、といっていいのかもしれない。

宗教はやっぱり怖い。でも〝怖いだけ〟じゃダメみたい

オウム事件、そしてその裁判は、日本人に、あらためて宗教の怖さを思い知らせた。事件後の新聞社などのアンケートによると、多くの人（特に大人）の間で、宗教に対する忌避感がどっと高まったらしい。

たしかに宗教は怖い。狂信はおっかない。尊師のためには人も殺す（らしい）し、毒ガスもまく（らしい）。だからオウムはやっぱりやばい（らしい）。でも、みんなもっと怖いことを忘れている。

それは、世界中の多くの民族や国家が、独自の宗教を持ち、信仰し、価値観の根っこにしているということ。

もちろん、キリスト教やイスラム教、仏教やヒンドゥー教を、オウムといっしょくたにするつもりはない。でも、普通の人間には見ることも、さわることもできないもの、たとえば神とか真理を想定して、そこから世界や人間を考えていく〝形而上学〟である点では同じだろうと思う。

日本人は、なぜか〝知性的〟と呼ばれる人ほど、この手の形而上学を毛嫌いする傾向がある。だけど、資本主義や民主主義といった考え方にも、あるいは科学思想にさえ、根っこのところで宗教の考え方が影響を与えていることを思えば、単純に「宗教怖い」とも「宗教なんて迷信」とも、言っていられないって気がする。

そこで社会科学の権威、橋爪大三郎氏のすすめる10冊は宗教がわかる本ということになる。橋爪氏は憂えている。

「日本人は根本的なところで他の人間のことを信じているんですね。同じ人間なのだから、話せばわかる、理解しあえると。だから宗教がいらないんでしょう。しかし、世界の大多数の地域では、そんな甘い考え方は通じない。他人は潜在敵です。他国も潜在敵です。しかし、敵同士でもなんとか共存していかなければならない。だからこそ、共存のルールとして宗教が必要だったのです。つまるところ、宗教を理解せずして外国を理解することも、ひいては、日本を外国に理解させることも決してできはしないでしょう」

宗教へのルートは2本。信仰の道と理論の道。まずはブッディズム

宗教を知るためには、まずは信仰、たとえば何かの宗教に入信するのが必要なのかと思ってました。

「そんなことはありませんよ。われわれは宗教を通して、自分たちの属する世界と、それ以外の世界、つまり外国ですが、それらの根本的な成り立ちを理解しようとしているのです。ですから、宗教の理論を〝理解〟することがまず第一です。信仰は、そこから先の、個人の問題となります。そもそも多くの宗教は壮大な理論体系を持っているのですから、その把握には、相応の知的努力が必要になるのです」

「南無阿弥陀仏で幸福になろう！」なんて本じゃなく、先生のすすめる難しそうな10冊を読むほうが宗教を理解できるわけですね。

「……当然です。まず、中村元の『ナーガールジュナ』。中村さんは日本仏教学、特に原始仏教の権威で、立派な研究成果を数多く残していらっしゃいます。ナーガールジュナは漢訳で〝龍樹〟と書きま

すが、般若経のすぐれた注釈書である『中論』を著し、〝空の思想〟を説いた人物です」

色即是空の〝空〟ですか。（※注①）

「そうです。般若心経にある空の思想は、仏教思想の精髄です。空は〝無〟とはちがいます。そこのところが非常に難しい。しかし、空の思想を理解しなければ、仏教は絶対にわからないと言ってもいいでしょう。そのための最高の一冊だと思います」

次は平川彰の『初期大乗仏教の研究』ですね。これは小乗仏教から大乗仏教（※注②）への転換期のことが書かれているのでしょうか。

「そのとおりです。大乗仏教の起源について、限られた資料にきわめて鋭い社会学的考察を加えています。後代の浄土思想や法華経について知るうえでも重要なテクストですね。さらに、これを読めば、なぜ日本人が本当の意味で仏教を受容できなかったのか、ひいては、オウム真理教が自称するような仏教教団ではありえないことまでが応用問題としてわかってしまうという、すぐれた本なのですよ」

どうしてなんですか。

「教えたげません。てっとり早く教えると興味が半減しますから。ヒントは日本人もオウム真理教も、釈迦の定めた250の戒律を守っていないという点にあります。後は各自で考えてみましょう」

仏教の最後は鎌田茂雄の『中国仏教史』ですね。

「ごぞんじのとおり、仏教はインドで生まれ、中国を通って日本に伝わったわけですが、中国を通ることで大きく変わっています。中でも、もっとも変化したのは〝出家〟に対する考え方です。中国では、なんと出家をするのに政府の許可が必要だったんです。本来出家とは、社会の外、すなわち宇宙

や彼岸に価値を見いだして、社会の枠から脱出する尊い行為です。しかし、中国人は社会の外側、言いかえれば、政治の及ばぬ世界に価値や意味を見いださなかったわけです。ゆえに、出家を尊いこととは思わなかった。そうした政治性の強い中国人の本質が、実によくわかる本なのですよ、これは」

欧米人の本当の怖さは、キリスト教を知らないと、理解できない

自慢じゃありませんが、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（以下『プロ倫』※注③）ぐらいは読んでます。

「たしかに自慢するほどのことじゃありませんね。しかし『プロ倫』を読んでいるのなら、引き続いてカルヴァンの『キリスト教綱要』に、ぜひ目を通してもらいたいな」

カルヴァンといえば、救済預定説の人ですよね。神に救われるか救われないかは、あらかじめ決まっていて、人間の努力ではどうにもならないってやつでしょう。あらかじめ決まっているなら、信仰なんかしても仕方ないと思うんですが。

「いいえ。確かにカルヴァンの神学では、救済はあらかじめ決まっています。しかし、そこには必ず救済の〝しるし〟があることにもなっています。もし、自分が救済されていると思いこんで信仰や労働をおこたれば、それはそのまま神から見放された者の〝しるし〟と見なされます。そもそもカルヴァン神学においては、信仰を続けられること自体が神の恩寵であり、人間の自由意思など認めません。ですから、信者は必死で信仰を続けざるをえないのです。まさにハイゼンベルクの不確定性原理にもつながる世界観ではありませんか」

よくわかりませんが、シビアな考え方だとは思います。

「よくわからなくとも、このプロテスタントの理論が、欧米人の、さらに資本主義の根本精神を形成していることは事実ですからね。この理論の緊張感がわからないと、欧米人の考え方はわかりませんよ。たとえば、拝めば利益があるという宗教なら、利益があがれば、人は拝むことを忘れます。しかし、この理論に従うかぎり、人は休みなく信仰し、神に奉仕しなくてはならないのです。だからこそ欧米人は無限に富を集め、それを神に捧げようとします。資本主義の精神は、キリスト教信仰に裏打ちされているんです」

考えようによっては、欧米人の経済活動を邪魔するやつは、神の敵という理屈も成り立ちますよね。

「それから、この本とあわせて、『キリスト教史』も読むといいです。カソリックとプロテスタントの関係を知るためにも、キリスト教の歴史は押さえておかないとね」

宗教の数だけ世界がある。信仰の数だけ対立がある。神のために人は闘い続ける

キリスト教を考える以上、イスラム教とのかかわりは見逃せませんよね。湾岸戦争にせよ、最近の中東和平にせよ、宗教が理解できないと、見えてこないことがたくさんあるような気がします。

「そういう意味でも先ほどあげた『キリスト教史』は得るものが大きいですよ。イスラムとの対立にもふれられていますから」

なんでキリスト教とイスラム教はああも仲が悪いんですかね。

「歴史的に見ればキリスト教の責任ということになるのでしょう。もともと、ユダヤ教とキリスト教、

そしてイスラム教は同系の宗教なんです。ユダヤ教のヤハウェも、キリスト教の父も、イスラム教のアラーも同じ神様なんですよ。イスラム教ではイエスを重要な預言者の一人と認めているぐらいで。しかし、キリスト教が教会という組織と、それを保護する国家を背景に発展してきたのにくらべて、イスラム教はあくまでコーランを拠りどころとしています。極論すれば、イスラム教徒にとっては、コーランと宗教裁判所さえあれば国家など必要ではなかったわけです。それが、国家と教会の二人三脚でやっているキリスト教徒から見ると、教化すべき低級民族に映ったんでしょう」

自分たちこそ、コスモポリタン(世界市民)と思っていたイスラム教徒が腹を立てるのも当然ですね。

「まあ、それ以外にも複雑な問題が多々ありますがね。それを知るためにも、ハッラーフの『イスラムの法』から始めてください。まず、これを読んでイスラム教の考え方をよく理解することです。さらにあわせてウェーバーの『古代ユダヤ教』も読む。ウェーバーは『プロ倫』があまりにも有名ですが、これも彼の優れた業績のひとつです。ユダヤ、キリスト、イスラムを貫く一神教の理論構造が緻密に分析されています」

これだけ読んで、しかもきちんと理解するのは容易じゃないって気がします。

「なんの、なんの。世界には実に多くの宗教がありますから、こんなのは序の口ですよ。これ以外では、保坂俊司の『シク教の教えと文化』、宮崎市定の『論語の新研究』、津田真一の『反密教学』などを挙げておきたいですね。特に『反密教学』は、オウム真理教のヴァジラヤーナ(金剛乗)の考え方を理解するのにも必要ですから、興味深く読めるでしょう。くりかえしますが、宗教を探究することは、人間の思考を支配する最大のプログラムをたずねる知性の旅なんです。特に日本人は宗教への理解が

不足してるわけですから、意識してやらなきゃいけません。そうでないと、本当に世界の人々とつきあっていけませんよ。わかっていただけますよね」

は、もう十分に……。

※注① 空の思想……般若心経などに代表される大乗仏教の中心思想。あらゆる存在には固定的な実体というものはなく、縁起によって生成・展開するという考え方。たとえば水は、温度などの縁起によって、水蒸気や氷に変わるわけで、実体として〝水そのもの〟はありえないと説く。

※注② 小乗仏教・大乗仏教……釈迦入滅後、その弟子たちはある者は僧院に、ある者は山野に寝起きして瞑想と学問に励んだ。しかし、社会生活を行う在家信者たちは、そうした極端に禁欲的な修行者たちとを分かち、釈迦の遺骨を祀った仏塔（ストゥーパ）への供養と信仰を中心とした別教団を形成した。彼らは自らの仏教を大乗（大きな乗り物）と称し、それまでの利己的修行のみを目指す仏教を蔑みをこめて小乗とした。阿弥陀仏の信仰などは、ここから始まっている。

※注③ 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』……M・ウェーバーの著書。ウェーバーはこの著書の中で、近代資本主義とその合理的組織の形成主体を小・中生産者層に求めた。彼ら小・中生産者はカルヴィニズムの世俗内的禁欲思想に影響を受け、神が与えた天職に殉じて額に汗して働き、利潤を得ることこそ、神への奉仕であり、信仰そのものであると確信するに至る。ここにおいて、資本主義はその倫理的正当性を獲得し、近代資本主義がスタートすることになると位置づけられた。

はしづめ・だいさぶろう●
1948年神奈川県生まれ。東京工業大学社会理工学研究科教授。学生時代から構造主義を踏まえた〝言語派社会学〟の樹立を目指して執筆を続ける。性、言語、権力を基盤にした記号空間論を展開。フリーでの執筆活動の後、89年東京工業大学助教授。後に教授。著書は『言語ゲームと社会理論―ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』（勁草書房）、『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）など多数。

橋爪大三郎の外国人とうまくつきあうための宗教本10冊

『ナーガールジュナ』
中村元　講談社　品切れ

仏教思想における「空の思想」を、大乗仏教の思想基盤とし、その哲学的・理論的構成をとのえたのがナーガールジュナである。本書では、この人物の生涯と思想の両面に光をあて、その著作にして、インド思想史上もっとも難解なものとされる「中論」の理解へと導く。大乗仏教理解のための第一級の著作。

『初期大乗仏教の研究』（平川彰著作集③④）
平川　彰　春秋社　③7767円　④7573円

小乗から大乗仏教への転換移行は、仏教の教理的組織的な発展契機として研究する意味が深い。本書では、原始仏教、部派仏教と大乗仏教の教理の比較検討、社会背景や初期大乗仏教教団の形成過程の精密な分析を通して、仏教の思想的社会的意味の核心にせまろうとしている。

『中国仏教史』（全8巻）
鎌田茂雄　※1・2・3巻は品切れ　6・7・8巻は未刊　東京大学出版会　④1万円　⑤1万3000円

中国社会に急速に浸透する仏教伝播の軌跡を、精密な資料分析と理論的追跡によって再構築する。インドからの翻訳僧の来朝、翻訳教典にもとづく学派仏教の成立、さらには道教などの土俗信仰と仏教との接点など、中国仏教の理解にかかせない書。

『キリスト教綱要』
カルヴァン／著　渡辺信夫／訳　新教出版　品切れ

カルヴァンの筆による本書は、キリスト教神学の大転換点であるとともに、近代資本主義精神の中核形成に寄与した点において、世界史的な価値を持っている。神学的正否はさておくとして、注目すべきは、その論理構成であり、世界観である。ウェーバーの著作などと併読すると、より理解が深まるだろう。

『キリスト教史』
J・ダニエル、アンリ・イレネ・マルーほか／著　上智大学中世思想研究所／訳　講談社　品切れ

新約聖書成立の時代から現代に至るキリスト教の全体像を明快に解き明かすわが国唯一の総合的キリスト教史。ギリシア・ローマ思想との激しい対立を乗り越え、ついに公認され、ヨーロッパ思想の核となっていくプロセスを正確に把握できる。

『イスラムの法』
ハッラーフ／著　中村廣治郎／訳　東京大学出版会　4200円

イスラム社会の法律は、その法源（法律的規範）を宗教においている。言うまでもなく第一法源はコーランであり、個々の裁判官はようやく第四法源であるにすぎない。イスラム社会を十全に理解するためには、イスラム法の基本的な理論を把握する必要があり、本書はそのために最適の一冊である。

『古代ユダヤ教』
M・ウェーバー／著　内田芳明／訳　みすず書房　品切れ

古代イスラエル宗教の1000年の発展過程を、自然環境、経済的状況、宗教倫理、経済

倫理などの観点から分析した名著。後にキリスト教を生むユダヤ教の根本原理（一神教、契約の観念など）について社会学的な考察を与えている。

『シク教の教えと文化』
保坂俊司　平河出版社　2718円

日本においては宗教的テロリズムの側面のみが強調されがちだったインドのシク教の実際の教えと、その独特な文化形態について、比較宗教学的な立場から実証的に分析した日本で初めての書。インド社会において、相対的にアンフェアな扱いを受けてきたシク教の実情、ひいてはインド社会の問題点を学べる一冊。

『論語の新研究』
宮崎市定　岩波書店　品切れ

西洋の聖書にくらべられる東洋の書を挙げれば、言うまでもなく「論語」。多くの解釈、注釈によって発展してきた論語研究だが、今いちど原典にたちかえり、論語、そして孔子思想の本質を見極めようとする一冊。アジアの思想構造を理解するうえで欠かすことのできないテーマを扱っている。

『反密教学』
津田真一　リブロポート　2900円

密教は、仏教における正統的な教理と呪術・土俗信仰とのダイナミックな結合によって成立した一種の神秘思想である。7世紀ごろに成立した大日経、金剛頂経を中心教典とする密教の思想を〝反対に〟たどり、原始仏教の思想と体験の核に迫る。

取材・文／佐々木英輔
撮影／川上尚見
『ダ・ヴィンチ』96年8月号に掲載